



さいたま市立宮原小学校 学校だより



令和7年1月7日 第11号

学校教育目標 心身ともに健やかで主体的に生きる子どもの育成

・たがいに努める子（やる気） ・たがいにきたえる子（元気） ・たがいに手をとる子（勇気）

目的・目標

井上 雅史

明けましておめでとうございます。皆様が健やかに新しい年を迎えられたことを、心よりお慶び申し上げます。そして、令和7年が、皆様にとって幸多い年となりますようお祈り申し上げます。

本日より令和6年度の3学期が始まりました。3学期は学年のまとめの時であり、次の学年に向けて準備の時となります。短い期間ではありますが、令和7年の1年間の見通しをもてるよう、丁寧に教育活動に取り組んでまいりたいと思います。

新しい年になると様々な場面で「今年の抱負」という言葉を聞くことが多いと思います。今年の抱負をたずねられる方も多いのではないのでしょうか。「抱負」とは「心中にもつ決意・計画」の事です。別の言葉に言い換えると、「目標」や「志望」が当てはまるようです。他にも「目的」「ねらい」「めあて」など、似た意味の言葉は多くあります。学校の授業でも「目標」「めあて」はよく使う言葉です。これらの言葉は、使う場面によって意味が多少異なる場合もありますが、いずれの言葉も未来に向かって進む、ポジティブな気持ちを表現しているのではないのでしょうか。

さて、目的(ねらっている、ゴール)や目標(ゴールに向かう道しるべ)をもつことについて伝える「三人のレンガ職人」という物語があります(イソップ寓話と紹介されることが多いようですが、実際の出典は不明だそうです)。あらすじは次の通りです。

旅人がある一本道を歩いていると、1人の男がレンガを積んでいた。旅人はその男に「ここでいったい何をしているのですか？」と尋ねると「何って、見ればわかるだろう。朝から晩まで、俺はここでレンガを積まなきゃいけないのさ。」と答えた。

もう少し歩くと、レンガを積んでいる別の男に出会った。旅人はまた尋ねた。2番目の男は「俺はね、ここで大きな壁を作っているんだよ。これが俺の仕事でね。この仕事のおかげで俺は家族を養っていけるんだ。」と答えた。

またもう少し歩くと、別の男がレンガを積んでいるのに出くわした。旅人はまた尋ねた。3番目の男は「俺たちは、歴史に残る偉大な大聖堂を造っているんだ！素晴らしいだろう！」と答えた。

1番目の男は、レンガ積みをやらされているだけで目的も目標もありません。2番目の男は、生活費を稼ぎ家族を養うことが目的なので、例えば「〇〇までにレンガを〇個積み上げて〇〇程稼ごう」というような報酬を得るための具体的な目標をもつといえるでしょう。3番目の男は、後世に残る事業に参加して世の中に貢献することが目的です。報酬や周りからの評価のためではなく、やりがいや達成感など、自分自身の内から湧き上がった動機によりレンガを積んでいます。ですから、少なくともその大聖堂完成のビジョンに向けて具体的な目標を自分で立てて集中力を発揮していくでしょう。

この話には続きがあり、10年後の男たちの姿が描かれています。1番目の男は相変わらずですが、2番目の男は高いスキルを身に付け、3番目の男は広い視野をもった責任ある立場になっていました。

この話はビジネスの研修でも用いられるそうですが、私には、子ども達が「やらされている姿から、夢に向かって目標を立て、自ら考え行動する姿に成長し社会的に自立していく様子」を表しているとも見えるなど感じます。そして10年後の彼らの姿は、今だけでなく、未来の自分の姿を見据えて行動する大切さを教えてくれているようにも感じます。

令和7年も、子ども達が様々な経験を積み重ねながら興味・関心を高め、目的(夢)に向かって自ら考え協働的に学び続ける子ども達を育てる学校を目指し、「やる気・元気・勇気」を合言葉に、皆様と力を合わせて教育活動に取り組んでまいります。

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。